

社会研究部門

加納隆至・大沢秀行・鈴木 晃

研究概要

- 1) アフリカ地域乾燥サバンナにおけるオナガザルの野外研究

大沢秀行

カメルーン北部のカラマルエ国立公園においてパタスザルおよびミドリザルの野外研究を1984年より続けている。1988年に引続き1989年は両種の採食行動の比較およびパタスモンキーの雄を中心とした非交尾期の社会関係の調査を行った。

- 2) オランウータンの社会・生態学的研究

鈴木 晃

1988-89年に行ったインドネシア・クタイ国立公園のオランウータンの社会・生態学的研究の資料の整理とまとめを行った。また、生息地の熱帯雨林の保護問題に関しての活動も行った。

- 3) 類人猿の比較社会学・生態学的研究

鈴木 晃

東南アジアのオランウータンとアフリカのチンパンジーの調査結果の整理とまとめを行った。

- 4) 上信越のニホンザルの地域社会学的研究

鈴木 晃

上信越ニホンザル研究林に生息するニホンザルの地域社会学的研究の継続的研究を続けた。

- 5) 父子判定に基づくニホンザルの繁殖戦略の研究

大沢秀行・光永聡子⁽¹⁾

生化学研究部門で開発した父子判定の技術を利用し、これまで不明であった雄の繁殖効率、および繁殖戦略の研究を1987年度より開始した。1989年度は前年に引続き交尾を観察、さらに週一回の採血によるホルモンレベルの調査も生理部門と協力して行った。

霊長類研究所のニホンザル若桜放飼群の交尾回数、交尾時間、交尾努力、繁殖成功率と交尾個体の年齢・順位の関係进行分析した。また、同じ若桜群を引続き観察し、昨年度の資料と比較している。

論文

- 1) Kano, T. (1989) Sexual Behavior of the

pygmy chimpanzee. In : P. Helthe & Marquart (eds) Understanding Chimpanzees, pp : 176-183.

- 2) Ihobe, H.⁽²⁾ (1990) Interspecific Interactions Between Wild Pygmy Chimpanzees (Pan paniscus) and Red Colobus. (Colobus badius). Primates 31(1):109-112.
- 3) Furuichi, T.⁽¹⁾ (1989) Social Interactions and the life history of female Pan paniscus in Wamba, Zaire. Int. J. Primatol. 10:173-197.
- 4) Oi, T. (1990) Population Organization of Wild Pig-tailed Macaques (Macaca nemestrina nemestrina) in West Sumatra. Primates. 31:15-31.

報告・その他

- 1) 加納隆至 (1989) サル社会から人間社会へ。HITACユーザ 89-10, NO.303 : 9-15.
- 2) 加納隆至 (1989) 猿は集団の中でどう生きているか? 放射線取扱主任者部会設立30周年記念, 第30回主任者研修会 (部会総会) 要旨集 : 25-31 (1989年11月15日).
- 3) 加納隆至 (1989) リンガラ語. 朝日ジャーナル11月17日号 : 56.
- 4) 加納隆至 (1989) ボノボ (ピグミーチンパンジー) の社会構造. 学術月報 432 (12) 通巻540号 : 6-11.
- 5) 大沢秀行 (1990) パタスモンキーの社会. アフリカに霊長類を探る—人間以前の社会学 (河合雅雄編) : 357-370. 教育社.
- 6) 鈴木晃 (1990) 熱帯雨林そして日本. (森林フォーラム実行委員会編) : 276. 日本経済評論社.
- 7) Suzuki, A. (1990) Socio-Ecological studies of Orangutans and Primates in Kutai National Park, East Kalimantan in 1988-89. Kyoto University Overseas Research Report of Studies on Asian Non-Human Primates VI.
- 8) 五百部裕 (1989) チンパンジー社会から人間社会へサルはどこまで人間か (江原昭善編) : 318-328. 小学館.

(1) 研修員 (2) 大学院生

学会発表

- 1) 大沢秀行・光永聡子・井上美穂・竹中晃子・杉山幸丸・A. Soumah・竹中修 (1989) ニホンザル配偶行動のクラス間差異. 第5回日本霊長類学会大会. 霊長類研究 5:143.
- 2) 大沢秀行・光永聡子・井上美穂・竹中晃子・竹中修・杉山幸丸・野崎真澄・佐倉統・S. Gaspard (1989) ニホンザルの配偶行動のクラス間差異. 第8回日本動物行動学会大会講演要旨集:18.
- 3) 鈴木晃 (1989) 熱帯雨林国際シンポジウム, 熱帯雨林国際シンポジウム実行委員会 (9月10日・東京).
- 4) 鈴木晃 (1989) 1983年のカリマンタン熱帯雨林の大山火事以後のオランウータンの土地利用と食性. 第43回日本人類学会 (岡山).
- 5) 五百部裕・加納隆至 (1989) ビグミーチンパンジーの単位集団の出会い. 第26回日本アフリカ学会学術大会研究発表要旨:1.
- 6) 五百部裕 (1989) ビグミーチンパンジーのオス間関係の単位集団間比較. 第5回日本霊長類学会 (東京).
- 7) 古市剛史 (1989) アフリカ大型類人猿の社会構造と人類進化. 第43回日本人類学会・日本民族学会連合大会抄録集:89.
- 8) 大井徹 (1989) マカカ属における配偶システムの進化について. 第5回日本霊長類学会 (東京).
- 9) 松村秀一⁽²⁾ (1989) ニホンザル嵐山E・F群のワカオスの群れ移籍と社会交渉. 第5回日本霊長類学会 (東京).
- 10) 小林隆⁽²⁾ (1989) 都井岬の半野生馬における集団形成の季節変化. 第8回日本動物行動学会 (東京).

変異研究部門

野澤 謙・庄武孝義・和田一雄

研究概要

1) ニホンザルの集団遺伝学的研究

野澤 謙・庄武孝義

ニホンザルの血液蛋白の構造を支配する遺伝子の変異を電気泳動法によって検索し, 群内, 群間の変異性を定量化する. 現在までにニホンザル51

群, 総個体数約3,409頭の血液試料について, 35種の蛋白の構造を支配する計38遺伝子座の検索を行ってきた. また新たにミトコンドリアDNAの多型を標識として加えた. これらデータをもとにして, 統計的検討を加え, 繁殖単位間の毎代の移出入率, 遺伝的変異の散布範囲などについて定量的推定を行い, ニホンザルの繁殖構造を解明すべく作業を続行中である. '89年度は共同利用研究者と共同で等電点電気泳動法を用い, DBP (Vitamin D binding protein) と ORM (Orosomucoid) の変異遺伝子の分布状況を明らかにした.

2) Macaca属サルの系統的相互関係

野澤 謙・庄武孝義

ニホンザルを含むMacaca属サル各種から材料を採集し, 前項1)と同一の方法によって種内・種間の遺伝学的変異性を定量化し, それら種間の遺伝子構成上の差を遺伝距離で表現し, それに数量分類学的手法を適用して枝分かれ図を描く. それにより種間の近縁関係, 分化時間の推定等を行う作業を目下続行中である.

3) 家畜化現象と家畜系統史の研究

野澤 謙・庄武孝義

在来家畜とそれらの野生原種の遺伝学的野外調査によって, 家畜化現象そのものの集団遺伝学的解明と, 個々の家畜内で地域集団間の遺伝的分化の程度, 系統的相互関係の解明を行いつつある. '89年度にもネパールにおいて海外調査を行い前回調査の資料不足分を補足した. さらにナイロビにあるILRAD (International laboratory for research on animal diseases: 国際動物病研究所)にてJICAの援助によって, アフリカ在来牛の起源を求めるプロジェクトに参画した.

4) ヒヒ類の種分化に関する遺伝学的研究

庄武孝義・野澤 謙

'89年度には'88年度から5年計画で開始した“エチオピアにおけるヒヒ類の種分化に関する研究”の予備調査のためエチオピアに行き'92年度までの文部省科研究費によるアジスアベバ大学との野外共同研究を具体化させた.

5) 中国黄山でのチベットモンキー研究

和田一雄

チベットモンキーの社会行動のまとめを行っている.